鑑地獄変相図

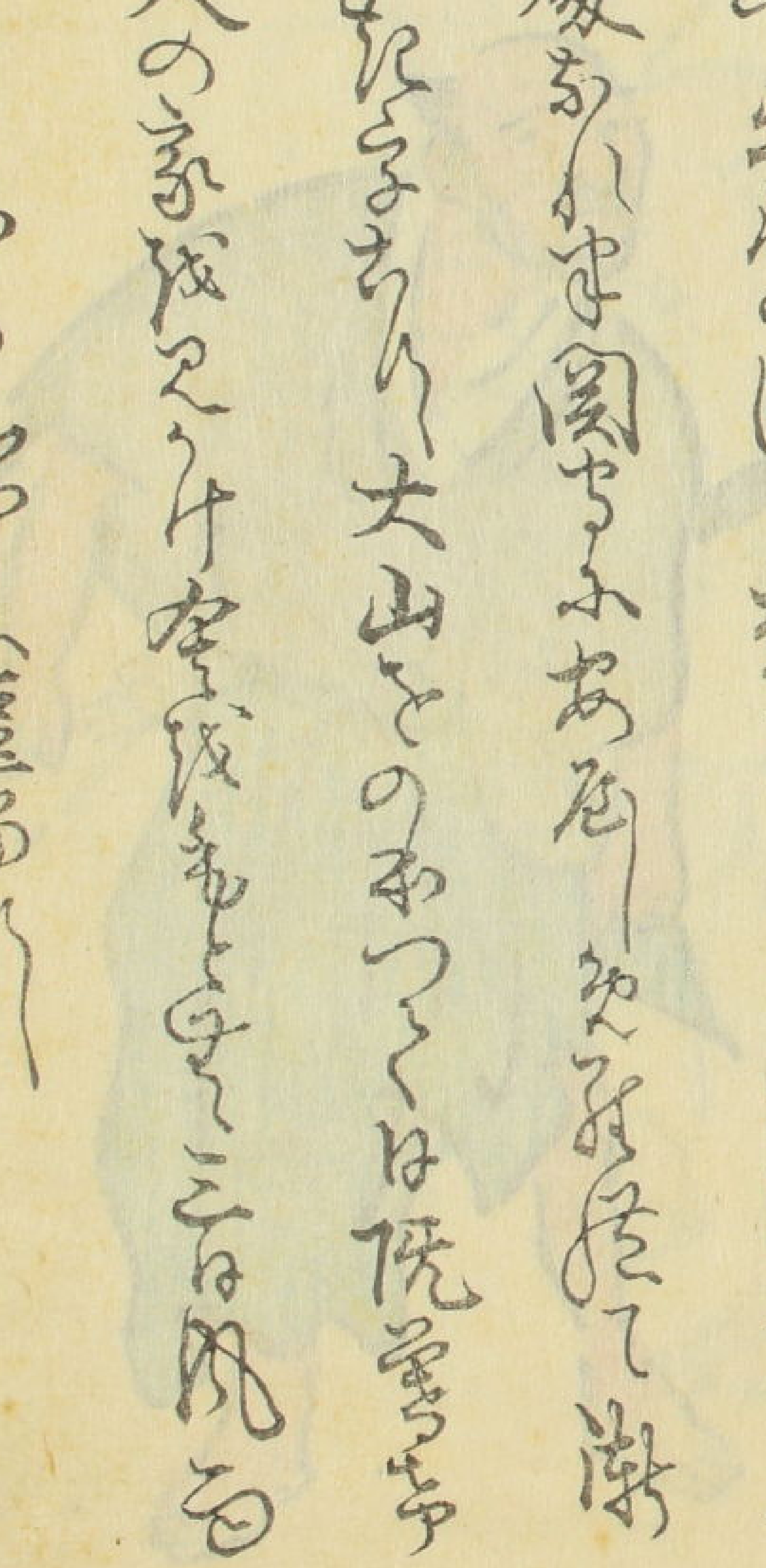
下

へ 5
4523

○岩手の里小くろ
崎名所也
○鳴子の湯 俗説ニ
啼子の湯と云
源のよしつねの方
京の君ゟ産ミ
亡子君を伴ひ應ぞ
処まで越ミ入ニし
来りし産所を
とてまちうけナクコ
温泉ト云
○尿前関所也
シトマヘ
此関の名ハ上古の事也
今仙台室南部
出羽山形三領の
境ニあるのみを
以て要所也
関守ニあやしめ
らるゝ故是也
○封人マモリ境守
を云舍やどり
を傳ニ宿を舍
と云

芭蕉翁奥の細道下の巻

南部道遥にみやりて岩手の里に泊る小黒崎みつの小嶋を過てなるこの湯より尿前の関にかゝりて出羽の国に越むとす此路旅人稀なる所なれは関守にあやしめられて漸として関をこす大山をのほつて日既暮けれは封人の家を見かけて舎を求む三日風雨あれてよしなき山中に逗留す



門 人 5
號 4523
巻
昭和十一年三月三日購求
4523
11-3-3

○関守ニアヤシメラルハ仙タイ南ノ出羽山形三領ノ境番所ナリ

○究竟 クキヤウ 史記ニ屈強ト出 両説

○大難所ヲ山伏ハトトヽ云

○森〳〵 シン〳〵

○雲煙ヨツテ生ル 杜甫カ詩ニ 已入風磯雲狸ニ 雲煙 旋風カ雲の土を ふきまくるなり

○恙ツヽガ ツヽガムシ 一説ハコレ人宅居セ時ニ云ヒ出シテ人ヲ害スト 恙ト猛ト連ネル 又猛ト云獸ヨリテ 人ヲ喰フト神異 経ニ出タリ

○良弼ハ先達ノ 名ノ八才ナリ

○彼ハ常ものの式文世俗の風流をなむ
むさうち内心
あさすまさるものも
ゆれを風諫のさ
をふくみ有るに
ゆゑ他流の骨
髄落涙ぞよ
○祇まろこ
北ほうて在ることを
思なうてねもら
ちふをを是こ
○かひや
山寺の人木屑をく
すなをほうふを
をを又麻火家も
麻を焼こ去るよ
はこのひや螢の明
飼生ある〳〵
○碧の卯墓の好
ものあるれこのひや
のの下の蟾のこと
○まゆとさ
蒭の根をこのの
ひえをもあり
○螢飼コカイ
赤代ゆゑ
日本記出さう

ものあれ志い所まこひ考ふ折ゑうひて作
去ふ旅の情をも おあ程とは比ゆゑ色て生涯の
いたさ程さるゑふ毛ゑ形ゑ作る
涼しさ我我あるゑ行ゑ
立ひ出くかひ屋下の墓の蔭
まゆを絵とゆゑ屋ふのも
望朝ゑる人を哀の姿うれ弟ゑ
山形領よ立石寺ゑ山ゑあ慈覚大師の開

基ゑて孫よ清原ゑ地ゑ一ゑ生ゑ
ゑよゑつゑを沢ゑ山ゑ分ゑ一ゑ雪ゑ生ゑ
ゑ形ゑは山ゑ寺ゑ井ゑ坊ゑ宿ゑこのゑ山ゑ
山上の岩ゑのある岩ゑ巌ゑをまゑ山ゑ松柏
年月土石崖ゑ苔毎滑ゑ岩上の流ゑ廊ゑ
物のゑゑ山ゑ岩ゑを立て仏閣ゑ
ゑ佳景寂寞ゑ生ゑ人ゑ蝉ゑ

閑さや岩にしみ入る蝉の声

○山形最上郡ノ
立石寺ハ千五百
年ノ昔慈覚大
師ノ開ス慈覚大
師入定ノ地ト云
○松柏
柏役ヲシ合テ云
ウソノ木ニ松ハ
○岩ヲ
這ヒ苔岩石ニナ
ヲ覆ヒアヒニカタシ
○寂寞セキバク
ヒッソリシテヒ
物ノ音ナキ
○岩ヤ
セミノコエ
壺中ト云仙士
ハ壺ヲ
岩ノ穴ヲ
蝉塚ト号ク

実上川の名所と云石田と云所は船を待宴をふるさ
俗詩の程こゝにあれこゝに居男ふのむらゝ多きこゝ
葛角一春の花ろ波風こゝ生ア然こゝよさこゝ波
く新古ふ事ろ多く海遠ふ人以ろ以道ろ人する
人多くれまゝ山ろ多くこゝ一巻絵ゝ多くの風
流愛ふ至程也

○胡国にてゝ笛を船と云或ハ用ふ云ア所の物ふてつくる如ク実状ゝてかくゝ多くたゝこゝて芭角一声ゝ

○ゴテン 碁上ミ碁石を並ふめゝ川中ニ小岩ある也云其全黒ゴテンカ

○隼 ハヤブサ 鷹ふ似る鳥ふ矢の如き速ふ也

家上川ゝ多くみちゝ山形を水上ゝ多くむ
ゝ中ふ船を下ル是ふ稲つゝ多くゝ山形永ゝ
の中ふ船を下ル是ふ稲つゝ多くゝ山形永ゝ
ゝ多くゝ白糸乃滝ゝ多くゝ陸乃滝ゝ多くゝ
仙人堂ゝ嶋ゝ多くゝ長ゝ舟ゝ多くゝ

五月雨ゝ多くゝ家上川

六月ゝ多く羽黒山ゝ多くゝ国司左右ゝ云ゝ多く
孫て別当代寄附ゝ多くゝ梨ゝ渇ゝ南蛮の別
院ゝ多くゝ憐愍の情ゝ多くゝ

○板敷山名所之 古今常陸ニ有 多くゝ川ゝ多くゝ

○出羽黒山八月山乃中ニ有ゝて庄内在

○国司左右ハ高鳥ゝ云

○河間梨 アジヤ 天台東ニ言ミ限ル密経相承ノ所也

○但羽黒山ハ東叡山紀下ミて天台宗ニ北谷中谷南谷トテ坊舎あり

○出羽黒山ハ月山乃中ニ有

○仙人堂 常陸房海舟を記ゝ

○立水流 ゝ多くゝ

○雪とかゝらん風のまとゝ和歌あるとなほも苦と再案有べし

○紀陳大沙ハ推古天皇の臣下なり

○毛羽ハ羽毛の甲ハあるべし

○凡土地ハ法皇人民土地産物なを犯す旨之

四方坊よりおいて拝礼奉り

有うゝや雪をうゝとうらゝ南無

五月梅雨よりつゞく當山開闢能除大師の

きの代りくいもうる代をゝ妻延喜武子羽毛

黒山の形社を有黒雲宮黒の字ハ黒山や多き

ゝや羽黒山子中腹ゝゝ羽黒山やゝゝ出

羽といふる意島社毛羽ハ妖風の貢を献るゝ風

土地よりやゝ月山湯殿を今ゝ三山ゝ

○止観 シクハン 天台一家の旨とす処三天部中も尤軸止観と有

○円頓融通略 見彼抑也ゝ

○修験 シユゲン

○雲山 レイザン 天竺の雪鷲の山ゝ

○長 トコシナエ

○月山湯殿 ハ殿社修験せきまハゆるさいく

○木綿しめ ユウシメ 紙幣コヨリ ゝゝ修験の

○宝冠 ホウクハン 白布にて改を包むゝ

○弥力 ゴウリキ 先達のゝ

○雲霧 ウンム

○氷雪 ヒヤウセツ

○雪冥ハ 天上の六冥なゝ

當寺武江東叡ゝ属ゝゝ天台止観の月ゝゝ

圓頓融通の法ゝ修ゝゝ僧坊棟を並へ

修験行法を励まゝ雲山灵地の験力人ゝ且

杜ゝ繁榮長ゝゝゝ

八月月山よりの木綿ゝ紙幣を宝冠ゝ

法包ゝ施力ゝゝ雲霧山気

の中ゝ氷雪法ゝゝのゝ八里更ゝ月行

乃雲霧ゝ入ゝゝ息絶ゝ

頂より臻まで日は沒して月ぞ出る世を敷藻を枕
とて朴のもとより待日出て所清まで湯殿下
る谷の傍より振治小野と云有仏の形原を水流
樓〻岳より漂齋〻〻剱を持る月山〻弦を
切〻世を尋きる彼龍泉より剣を淬去きこのや
千将莫耶もむ〻をとるあ〻をより堪能の執おさ
のらぬる者なれきわ岩より獨うちて志すをす
らち〻三尺をとる桜のつわ〻ものらるあわ

○龍泉 リウセン 南西平縣ニ龍閘有ト
○潰 アラカ子 藏テツ〻 剣音セウ視〻之姚切遠〻
○釗 アラカ子ヲ 淬ヒヤスト ゆや
○太平廣記ニ云 干将莫耶カ劒ハ以水淬之トラ
○堪能 カンノウ すぐるる

山の上に積雪の下より堀〻こゝの春をとゝ
そ花もこの春のうらゝ那〻岩天の梅の愛子
の色をるまを〻行尊僧正の歌のあるこれもこゝ
れもしら〻はまさわて夢と思ふ〻此山中の
微妙の者の法式や〻他言するのと来ふ人仍
て書とゝやゝ記さん姑よこの一枝と何周梨の
雫よるん〻三山順禮の白短籍より書

ゝ〻さやかの言月の羽の思山

○行尊僧正の歌
金峯山にて
大峯にておもひ
うらゝ桜のさか
りなるを
もろともにあはれと思ふ山さくら
花よりほかに知る人もなし　行尊
○此山中の法式うそ
九て地獄有ものをゆ
るさん金銀もふ
石のこゝ〻人をとゝ
をゝ〻ゝ有〻ゝと
○ゆゝしりおそ出る
○六月言の句

○武川私 梵字川と云

○温海山 アツミヤマ
○吹浦 フクラ
ふくらとハ書

○風光 三景の内に在
○象潟 キサカタ
羽州由利郡にあり
十里の廣一こ住
家の数八十八戸九
十九家くゝ云ハ
くゝちきたくゝ
りとキサハ象の
和名と故ニきたく
くゝ云又蚶潟尾
小さくアカトの型
す有ニより此処
寺と村店寺と云
○方寸 ハウスン
一寸四方と云
医肩ニ方寸也
○摹擬 一ノ升
世説ニ出
○鳥海山 一音
高山て四時雪有
○雨も又奇しと
東坡カ詩の句
○象潟ニ美の名
有ル故ニ古歌
○アヽノ名ハ
今の文章出来の
辞ニ成

暑さとも海に入るや象上川

江山水陸の風光数を尽くして今象潟に方寸を責
酒田の湊より東北の方山を越磯を伝ひて行くこと
ふくゝ廿余里ほど新庄かゝふく比沙風出羽
を吹上る白勝獄として鳥海山かゝ新開中千
摹擬して白髪又奇しかゝ雪の時色
も又出羽もくゝ遠の名家に徳を入て雨の晴る
を待て象天然美く旭と那屋るゝ出る程に

象潟に舟をうかべて能因島に渡る船をとゞめて
島の上の岩を見るに波の打かけし跡あり
松の根に波の打かけし跡あり
島の形は松島に似たれども
松島は大海に浮かべる
象潟は海を干て田になせり
其地形の違ひ
象潟や雨に西施がねむの花
汐越や鶴はぎしらぬ声
象潟

○花の上曹
ヤ花の上の掛ものゝ
如くなるつもれる雪
○干潟珠玉の沒処
略す
○方丈四方一丈ヲ有
仏ての名
○簾レンスダレ詩ヲ
因ミ文化元年大地震
シテ象潟ノ美景
ヲ埋ミ今ハ田圃ト
ナリ往ミ是ニ千歳
ノ感ヲ憶ル

○有ヤ無ヤノ哭アル
沒ニ臨ミ鬼神出テ
人ヲ取ル妖ニ鳥有
テウヤムヤト鳴テ
鬼神ヲ招ク下略
○象潟の容形ハ東
坡ノ西湖の詩ニ
ぶり名ハ西施ノ
ヲ西施ノ様ニ
ヲ西施ノ様ニ
句法有テ

○雎鳩 ミサゴ
詩經ノ語ナリ
往古ヨリ
○巣カ笑 子ズカ
磐船郡ニ在越後
出羽国境ナリ
大日本史ニ云
孝德天皇大化四年
庚申治船磐舟柵備
エシ遣信濃越氏
置柵戸ニ文武帝
二年改磐舟柵ニ
金年今越後ニ
磐舟柵ニ元明天
皇六年割置出羽国
十二郡置出羽国ニ
是笑始ナカ今モ
国境ニ笑有ル頃
與勿皆エゾ也コヲ
征ス備見ユ

○又太平記ニ秘ガ
笑ト出ル
但子ズカ笑ニ
○市振ナリ
○神 社ナシ
○此ハ三ツ四ツ
ノ家ノ許ニ成ルベシ

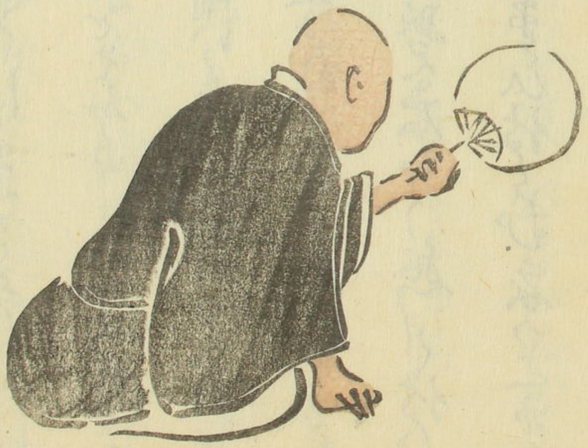
手佐ノ浦や海程なふ狭すつる岩ね
巣の多や戸板をまて夕すゝ笑 耳底
岩上に雎鳩の巣をつくる
浪たゝぬ巣うたあまてやみさこの巣多ん
酒田の象波日を重ねて北陸道の海ふ遥の
おもひ胸をいたます然て加賀乃府ゝ百三十里
少嵐実ゝ越後の地ふ越後の地ふ改
めて城中の園一振の実ふ以事ふ此日九日暑濕

実園ふ一振の
ゝ句有

○新潟 ニイカタ
蒲生郡ニ在ル
甲斐
○遊女の舟ハ短書ニ
ヲ多ク略ス

○此ハ三ツ半振
風ノ多ク宿ノ客ノ
○ハモトヨリ約ノ一
越中ニ向ル往来
此路ハ多モリ
歌ヲ多ク
一ツ一ツ三ツ約
ヲリ多ク

の号ふ称をなす病おこりて伏ると
文月や六日もの夜ふ星ハ逢
荒海や佐渡ふ横ふ天の川
くふ歌ヲ多ク
ふ小園一の舞ふ伏ゝ旁ふ
寒ゝ多ふ一宵ふ
はるゝ夕ゆ来ゝる
ゝる伏きゝふ越後の園新潟ふ



○白波の
古今
しら波のよするなきさに世をすくす海士の子なれは宿もさためす　よみ人しらす

○身をはふらかし
徒然草にちゝうれはふるとあり

○業因ゴウイン
前生の業力今ひきさるゝをいふ

伊勢参宮するとて此関まておのこの送りてあす
は古郷にかへす文したゝめてはかなき言伝なとし
やる也白浪のよする汀に身をはふらかしあまの此世を
あさましう下りて日々の業因いかにつたなしと云を
きゝ寝入てあした旅立に我々にむかひて行方し
らぬ旅路のうさあまり覚束なく悲しく侍れ
は見えかくれにも御跡をしたひ侍らむ衣の上の御
情に大慈のめくみをたれて結縁せさせ給へ

○加護カゴ

○黒部川の名と川ちか一里余中に数すちも流あり四十八ヶ瀬又俗にいろは川とも云

○那古　名処也
担籠タゴ　名所にて藤浪のおもしろいつれも古歌もおほくある

と泪を落す不便の事には侍れとも我々は所々にてとゝまる方
多し只人の行にまかせて行へし神明の加護かならす恙なかる
へしと云捨て出つゝ哀さしはらくやまさりけらし

一家に遊女もねたり萩と月

曾良にかたれは書とゝめ侍る黒部四十八ヶ瀬とかや
数しらぬ川をわたりて那古と云浦に出担籠の
藤浪は春ならすとも初秋の哀とふへき
ものをと人に尋れは是より五里磯つたひして

○有波阿アリウミ
又荒波阿
又有猛阿ヒ
○和の名山八くり
うゝ山のつきもし
此処の吾とゝ
岩ニ倶利迦羅
不動の堂アリ本
曽我仲合戦
の地ナリ

もゝの山陰よの遊の名をかすゝるふゝと芦の一枝の
宿りものあるまゝ
わきの秀やゝとゝ人右ゝ有機海
和の名山ゝるとこのうゝ吾ゝ城ゝ金澤い七月中
の五日し変ゝ大坂今うこのゝ吾人ゝあゝうゝとゝもの
ゝゝ旅宿をゝもゝ一笑ゝとゝものい浜ゝ
る名のゝゝ世ゝるゝ人ゝ仕ゝゝ子ゝ去来の
ゝ事世ゝうゝゝ其足ゝ善伐ゝ

○実盛サネモリ
又直盛トモ
斎藤別當ト号
○甲カブト
玉篇ニ甲カブト
古狩切六甲也
甲ヨロヒ
由月ナウカブトヨロヒ
世俗誤テ兜例
ヒ用ユ来レリ

嫁もゝこゝ事我法ゝゝい妹のこの形
あゝゝ所ゝいさゝ所ゝ
秋すゝゝもあゝふゝもゝゝ風茅
蓬中の吟
あゝゝゝゝ無ゝゝゝゝゝ嫁の風
小まゝゝゝ云ゝゝゝ
ゝゝゝゝ名やゝ松ゝゝ義貴
秋実ゝ古西の神社ゝ清実盛ゝ甲冑の切ゝゝ往昔

○実盛本源氏ニ属シ平宗盛ニ仕ヘ加賀国ノ住人義光ト

○ト仲大夫坊受明ニ合テ平家追討の願文ヲ云シ之奉納有ル神社也

源氏に属し時義朝に従ひ常に忠をぬきんでゝ
ゝ平士のものゝあらひ目底を吹返し手付
菊のゝ子ゝ形もの金をちりばめ龍頭に鍬形
手ゝ実盛本曽義仲願状ニ
ゝ社にこゝろ付ゝ櫛口次第に使ふ
ものあゝ縁記ゝ
むゝや形甲のゝ下ゝ
山中の温泉よりゝ白根の岳あゝよゝ形ゝ

○縁記 エンギ 仏経ノ縁の起リ ゝの起の事

○無慙 ムザン

○温泉大平寺の東南者

○白根ノ岳ハ白山ニ当時雪ヲ見ルゆへ名ト云ハ加賀ノ国歌ニ

○花山法皇人皇六十五代ノ御宇十九西国巡礼の祖ト此処ニ行幸ノ那智谷汲の三字ヲ表ス那谷寺ト号ス

○石山の句 近江の石山ヲ云ふ

○菊 用雅本卅 個目ニ

○菊ハ花ヲ愛ス物ノ花ノ匂ヒ則仏の匂ヒト菊の白ひのゝ 但男ハ温泉ノ

あゆみて尤の山陰より歌ヲ聞ヲ花山法皇三十ヶ
所の巡礼ヲ思ひ浮大慈大悲の像を安
置し那谷と名つる事ゝや那智谷汲乃
二字ゝ法ゝ法ゝ奇石さゝ古松ゝ
らゝ苔ふる石の小堂ゝ岩ゝ
石山の月ゝ句ゝ
温泉ゝ湯ゝ有ル次ゝ云
山中や菊ゝ花ゝ湯の白ひ。温泉ゝ

○久米ゝみを ゝ
つ人ゝのゝ桃妖
ゝ名典ゝすゝり
○辱 ハヅカシメ
○誹字説略

あゝゝとまるものゝ奈ゝ奈ゝとていとゝふゝ
彼ゝ文誹諧歌好ゝ洛の貞室ゝ宗の宗ゝ
愛ゝ来ゝ須臾雅ゝ厚ゝ ゝられゝ洛ゝ
て貞徳の門人ゝ系ゝ世ゝ ゝる切名のほゝ村
判朔の科ゝ受ゝ云今更ゝ ゝ ゝ宗男
ゝゝゝ股ゝ ゝ伊勢の国ゝ ゝゝゝ
ゆゝゝあゝゝ生ゝ ゝ
ゝゝゝゝ ゝ ゝ義の系ゝゝゝ

○雙鳧 ソウフイ
前漢書蘇氏
号李陵伝双鳧
俱北飛 ゝ南
朝 ゝのゝゝ

ゝゝ書ゝゝゝて ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
雙鳧のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
大平寺の ゝ今昌寺ゝゝゝゝゝゝゝゝ
地ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○衆寮 シウレウ
修行の僧ゝゝゝ
ゝゝゝ房ゝ

○鐘板　セウハン
○食堂　ジキドウ
○早卒　ソウツ
倉卒と有るべし
○庭掃　釈氏要覽
世説に出る意
○去路　又白大雷ちし知事木のおとの
往来
○汐越の松　不絶
歳月岩の苔
一説に崎村の
西に花宗の七
重塔有り
五六本あり内と
○はれの西行の歌
いつも山家集家
集おこさ
蓮如上人の
宗の徒弟云り
○指を去るに八荘子
枝於手者樹無用
用指也と注の
きあり

薄板ばかり食堂に入らんと越前の國へ行かんと
早卒なりし事下なるを知僧も我所我
こゝ階のもとまで長来る折ふし庭掃の押ちれた
庭掃よりやまこゝろ柳
やまこゝろ書捨つ越前の
境吉崎の入江を船に掉さして汐越の松を尋ぬ
松もみな〳〵昔のまゝ西行
月と昔ながらの汐越のまつ

○天竜寺　祥雲
○長老　釈氏要覽
有長者老年
德名長老
○北枝　あの門
十哲の一人
○余波　ナゴリ
○永平寺　曹洞
祥雲の古山
○五十丁山へ入て
境内の入口より山
中の寺なり

秋一番に耕景色若し耕をかふるものは
世界の指と書たるまゝ
九岡天龍寺の長老古き周あれば尋ぬ又
金澤の北枝といふものかつて発句送りし秋
をたゝしに来る所の風景をたゝ思ひ出て
打ちあを蹴ふる仏宝ばかりなる
松もうつくしき山さく余波の
五十丁山へ入て永平寺に詣す道元禅師の所

○邦機千里 畿ノ字の誤り。
○黄昏 タソカレ 日の暮かゝるを云 [illegible]
○今の俳諧附句 [illegible] タソカル
○等栽ハ旧名を[illegible] 桜井元輔の弟子[illegible]
○老さらほひてそ [illegible] 俊成

寺也邦機。千里を避てかゝる山陰に跡をのこし
給ふも貴きゆへ有とかや
福井は三里はかりなれは夕飯したゝめて出るに
たそかれの路たとたとし爰に等栽といふ
古隠士有いつれの年にか江戸に来て予を尋ぬ
遙十とせあまりなりいかに老さらほひてあるにや
将死けるにやと人に尋侍れはいまた存命
してそこそこと教ふ市中ひそかに引入てあやし

○道心の御坊 侘しき侍のやうに[illegible] 世人を云[illegible]
○むかし物語にこそかゝる風情は侍れと 源氏物語[illegible] 俳文[illegible]

の小家に夕貌へちまのはえかゝりて鶏頭はゝ木ゝに
戸ほそをかくすさては此うちにこそと門を扣は
侘しけなる女の出ていつくよりわたり給ふ道心
の御坊にやあるしは此あたり何かしと云ものゝ方に
行ぬもし用あらは尋給へといふかれか妻なる
へしとしらるむかし物語にこそかゝる風情は侍れ
とやかて尋あひて其家に二夜とまりて名月は
つるかの湊にとたひ立等栽も共に送らんと

○たとへ
○雑 剖ち角ゆ
○島日永巻

猶さすらふかまさりて遊の志をうつす事なり
衡白根の嶽いこのるしかつ比那ゝ高ゝ高ゝ
のさもむけの橋をわたりすぎて玉江の蓮を見て出
あくり警の関をすぎゆくを路を北へ北へ
妹とゝるゝ山ゝ初雁を聞て十四日夕暮つるの津
より敦賀へ出ゝ夜船に乗て海路に時ゝ波の音
しかくあるこゝろやゝ風強く戌の刻の
四夜の月はゝとの見るゝ主より酒さゝらせて

○あさむつるゝ
民生は又麻生
はゝとゝ
○玉江 ほ拍き
文ゝとの玉江の芦
をやゝたさむい
ゆるゝの芦川
ゝてゝおさ まゝ文
○敦賀の津 笑
笑の赤ゝ名所し
方角抄
笑ゝの浦つゝ
ゝきゝゝていと
ゝゝ笑の赤
○ゆのと峠 ゝゝ
山の界ゝ茶屋三四軒
ゝつれゝ孫嬉ゝ
ゝ茶屋ゝのゝまゝ
ゝゝ花嫁ゝ出
○燈ゝ燈 ヒウチ
ユノヨ峠のむゝふゝ
ゝ仲の城アトゝり

○ゝゝ山 ゝ
旧蝋燭山 ゝゝ
深り今ゝゝ山ゝ
○後時はゝゝゝ
古侍ゝ
○気比の神 夜晴 奇知
笥飯 ケイし
○神寂 カミサビて
ゝゝゝゝゝ
ゝゝ仙ゝ
○越行二世の上人
相模ゝ沢ゝゝ
法仏ゝ寺ゝ
冊八ゝ通上人の弟子
ゝて他阿弥陀仏ゝ
ゝ代ゝ化アミダゝ
世人法師ゝ
ゝ男ゝゝ

氣比の宮神は夜叉ゝ仲哀天皇の清廟也社頭
神さびて松の木ゝ茂るゝ月のもゝ入ゝるゝ
ゝをゝゝゝの如く往昔越行二世の上人大願發
起のゝゝゝゝみゝゝゝゝを刈ゝ石ゝ擔ひ泥濘
をかゝゝゝゝ参詣往来の煩ゝゝ古例今ゝ
ゝゝゝ神ゝゝ生ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ越行の砂
もゝゝゝゝゝ真ゝゝの力ゝゝゝゝ
月清ゝ越行のゝゝゝる砂の上

十五丁真っ白の白すゝたゝくに俳

名月やかゝはれさうな沢

十六丁富たまゝの中浜たのかい貝ひろはせて

種の浦より船をはらひ海上七里の天屋何

某と云もの破笠竹杖をたゝき宿をかりあ

さを僕あるさゝやのせゝく長風吹の雪吹

見物せんとて徳ある姿ちかゝるまゝわれ

法華寺の麦をのこ国をあるくあるく

○中ほどの小貝
真蘇枋こ
あやた見こ
○種の浦
つるの入海の出
こ待宿名色浦こ
○此処入海こおくん
五里荒海大難こ

ゝ是のさゝ松さゝ蕉を塚まで

寂しさや次ゝ入ちかる浦の燈

浦のあやかしまの貝ひろふ萩の蔭

ゝ日のあたゝ等裁の音茂やうをゝく寺々

海は路通も共深ゝ出むかひて美濃の国へ

伊勢人詠ゝ出ひ大垣の庵ゝ入ゝ宿られ

伊勢ゝ参ゝ拝ゝ越人も馬をやとひて歩ま

ゝ川ゝ家ゝ入集る前川ゝ荊口父子ゝ出ゝ

○ゾセイ　本字
甦生ニヨミカヘル
○イタハル　労ノ字
子ギラウト訓ス
○伊勢の迂宮廿一年
目方九月廿日の
夜ニ
○文章のつまり
ありあれおの陣ら
ちやうちやうとも
はたらきなく
行つきすて文章
の二格一体なり

ゝは夜やふゝひろゝ蘇生のもれよ遷ゝ古をゝく旦
ろゝこむすん笛ゝる蘇ゝ子のうゝさ義いまゝ
やまゝ笛よゝ月六日よゝ蘆ゝ伊勢の迂宮爲
まむゝ又船ふゝ乗ゝ
ゝ国ゝゝの笛ゝみゝ子ゝ乗り教て

奥乃細道畢

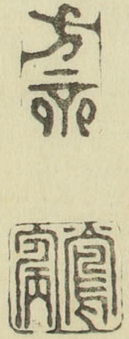
下ノ巻ニ

奥ゝ細道ゝ芭蕉翁奥府ふ
城陽遊ゝ紀而皆人ゝ聚玉也
発文中労以藻詩ゝ格雅調
俳文也行言隻字不可ふ金玉
雪歌味扈久録類音深矣
原書者素龍ゝ筆奥後

古来素龍書有跋坊間該本
書字拙而脫字誤字不少故
案不自撲著此解蓋原出
援引和漢故事及漢語
施邦訓之拙雜確案諸方
豈能盡其解乎因揭謝芸

村瑞寫畫圖以輔翼我解云

鬱斎子信述併模写



安政七年午晩冬